

木下尚江著作集

第十卷

明治文獻

木下尚江著作集第10卷（第十一回配本）

昭和四十六年五月三十一日第一刷発行C

著者 木下尚江
発行者 藤原正人

発行所 株式会社 明治文獻

東京都豊島区池袋2丁目1070

振替・東京 36290番

電話・東京 00521

印刷 江明印刷所
製本 昭栄堂

1391—040011—8309

序

一 昨年の春、予が上州の山居より歸りて、日暮里の一隅に暫ばしの假居を設けたるほどの時なりき。月影尙ほ寒き夕、予は一個未見の青年の來訪に接しぬ。彼は東都學界の現狀に慷慨し、故山に歸耕せんとの決意を齎らして、予の意見を求むるにてありき。彼が初めて政治家の演説に發憤して遊學の志を起したる時、彼の養父母は反對なりき。彼は今ま罪を兩親に謝して田圃の人とならんと欲するなり。予は滿腔の赤誠を捧げて賛成の微意を表したりき。後數日、彼悄然として再び來り告げて曰く、今日兩親の猛烈なる抗議に接しぬと。

既に一たび學に志す、必ず其の業を果すべし、中途にして徒らに歸る、何の顔あつてか能く郷黨に對するやと。是れ蓋し父母が抗議の依て來る所なり。予曰く、機は熟せり、今は直に歸山すべきの時なり、父母若し家に入るとを許さすんば、其の意の解くるまで、敢て斷食露宿せよと。彼の面は日の如く輝きぬ。予は其れを美しくと熟視したりき。

此頃また彼を思ふと切、即ち一書を飛ばして其の近狀を問ひしに、彼は忙中、直に返書を送り越しぬ。

「心性の開拓は一時も怠らざる積りに御座候、否な、其れが今日の小生には最大の要務に有之候。されど生來の愚物仲々に舊き道德、舊き習慣の衣を脱する能はざるに苦しみ居り候。

實は種々愚見も申上げ、且は御批評も蒙り度、是非御伺致す考には候へ共、今は迎も其意を得ず候まゝ、左に少しく平凡なる状況を御報道申上候。

先づ小生の家庭は養父母及び昨年迎へ候妻と小生都合四人(外に豚二頭、猫一匹、鶏三羽)至極小ッぽけなものにて候。曾て申上候通り養父は永年の病身なれば、少しばかりの商業を営み生計を立て居り候。ソナ工合からか、あらぬか、兎に角兩親は、小生を官吏か教員にもと望み居り候に、小生が半途百姓に相成候に就ては不尠落膽致したるにて候。

斯かる次第に候へば、無論田畑等と云ふものは、寸厘も無之、只小さき家を有するのみにて候。されば小生が情實を棄て、怒る

父、泣く母に叛いて斷然鋤を擔ふ身と相成候に付ては、第一に起り來る問題は、耕すべき土地に有之候ひし。小生が地方は人口の割合に耕地の少なき處に候へば、是れには小生も閉口仕たるにて候。勿論父母は其れに付何等顧る所無之、コンな土地で、ドウして小作が出來ると言ふのみにて候。東に走り西に奔りして、漸く三四反歩の小作は出來るとに相成、其れから先づ第一年の奮闘は、此の小さき舞臺の上に演じたるにて候。尤も桑畑だけは、小生が蠶業學校等をヤリ候道行より、其間に土地を借りて僅かばかりを植附置候ひしかば養蠶だけは多少氣強く出來たるわけにて候。されば第一年の百姓は、春夏秋の三期を通じて専ら蠶業に従事したるにて候。

第二年即ち四十二年の春を迎へ候と同時に、近隣のものが、切りに妻帯を勧め來り候のみならず、父母も是非にと言ふわけにて、或る農家の娘を迎へたるにて候。結婚と云ふ事に付ては、多少ならず考も有之候ひしが、行き掛りの上、なか／＼に思ふ通りにも參らず、父母の意に従ひたるわけにて候。然かし妻も一年有餘の同棲の結果か、近頃はドゥか役立つ位に相成申候。其れで第二年の仕事は勢い手廣く致さねばならぬわけには候へ共、小作が容易に出來不申候爲め、小生は種々勞働の手間取りを致候。

第三年即ち今年は、大分知る人も出來、且つは少しく百姓に付ての信用も出來候爲めか、彼處此處耕地を世話して呉るゝ人も

有之、新たに參反歩計り借り入れ候て、烟草の耕作と、陸稻の栽培を致すに相成候。烟草は本日植付を済まし候。初めての耕作なるに、何のわけか、烟草耕作上至難なりと稱する苗床が頗る上出来に候爲め、斯の道の専門家をして舌を卷かせ申候。尤も養蠶もやり候。蟻量十五匁即ち普通製と云ふものにて、約三枚強に有之候。百姓の方は大略コンなものに候。

更に心性の方面に至ては、携はる仕事の關係上から兎に角も自分だけでは頗る強固に、又た理想に向て發展し來りし様思はれ候。——聖書の研究は不相變致居候。要するに小生は未だ目的の初歩に有之者と存候。

小生はドウしても十字架を負はざる可らず候。他日何物をも棄

て、愛の爲めに斃るゝ機あるべしと、心竊に樂み居り候。

所謂書上の智を求むるの弊風は、今や殆ど農村の全部を掩ひ申候。都會の虚偽に驚き候小生も、今は却て田舎の虚偽に膽を冷やし申候。百姓の子弟にして官吏か教師にでもなり候へば、無上の成功と自らも誇り、他も羨む次第に候。されど此の荒れ行く人心の裡面には、驚くべき覺醒の種子も發芽致居候。さらば是れにて擲筆致すべく候。五月廿三日。

予は嬉しく、忝なく、讀みもて行く中、覺えず幾度も之を押し戴けり。今ま拙著の成版を告ぐ。即ち借りて卷頭を飾る。私書を公にするの罪は、予が謹で甘受する所なり。

明治四十三年六月

木下尚江

例 言

一、本巻には『小説火宅』を収録し、巻末には『新紀元』以下の数誌に掲載された戯曲・短篇小説及び日暮里・三河島での生活をうかがうにたる感想文を加えた。

一、本巻の「火宅」は弘学館書店発行の初版本を底本とした写真による覆刻であるが、表紙と巻末の広告はのぞいた。

一、「戯曲・小説・感想」の表記は初出に依拠した。ただし

(イ) 活字の大きさについては初出を無視した。

(ロ) 漢字は敢て正体に統一せず、初出に依ったが、明治時代に用いられた異体の漢字で、現在用いられていないものは、やむをえず正体を用いた(例 場↓場)。

(ハ) 「と」は「こと」とし、変体仮名は通行のものに改めた。

(ニ) 踊字の使用は校訂者の判断によった。

(ホ) 振仮名は難訓の場合をのぞき、取り去った。

以上のほかに初出を変更した場合は、すべて末尾の「校訂表」に書き出した。

一、「解説」の漢字は、引用文も含めて、新字体に統一した。

小火宅

火

宅

木下尚江著

第一

(一)

人生の最大疑問は「死の恐怖」である。人は言ふ。けれど芳男は少年時代から之と反對の感想を抱いて居た。少年同志の談論の上にも生死問題は數々花を咲かせた。而して、

『誰も自ら好んで生れて來たものは無い。然かし既に生れて來て仕舞つた上は仕方が無い。故に問題は只だ前途に我を待つ死の暗黒のみだ』

斯^かう云^いふ議論^{ぎろん}を、芳男^{よしを}は毎々^{まいぐとも}友達^{ともだち}から聴^きかせられた、けれど彼の感想^{かんそう}は全^{まった}く之^{これ}と反對^{はんたい}であつた。

『暗黒^{やみ}か、光明^{ひかり}か、其^それは知^しるとが出來^{でき}ない、何^{いづ}れにせよ、避^さけるとの出來^{でき}ないのは死^しの到來^{とうらい}である、誰^{たれ}も死^しを喜^{よろこ}ぶものはあるまいが、然^しかし何人^{なにびと}も之^{これ}を逃^{のが}れるとの出來^{でき}ない以上^{いじやう}は、只^{ただ}甘んじて之^{これ}を受^うける外^{ほか}に道^{みち}は無い、故^{ゆゑ}に疑問^{ぎもん}は「死^し」に在^あらずして「生^{せい}」である、未^み來^{らい}の死^しは研究^{けんきう}するとが出來^{でき}ない、只^{ただ}生^{せい}のみが研究^{けんきう}の題目^{だいめく}とするの價値^{あたい}がある、何故^{なにゆゑ}に我々^{われく}は生^うまれて來^きたか、我々^{われく}は是非^{ぜひ}とも之^{これ}を知らねばならぬ』

芳男^{よしを}が曾^{かつ}て熱心^{ねっしん}に斯^かう論^{ろん}じた時^{とき}、並^なみ居^ゐる學友^{がくいう}は覺^きえず聲^{こゑ}を合^あはせて噴^ふき出^だして笑^{わら}つた、其^その笑聲^{わらいこゑ}の裡^{うち}には、芳男^{よしを}の疑問^{ぎもん}に對^{たい}する十二分^{じふにぶん}の嘲弄^{てうろう}の意味^{いみ}が含ま^{ふく}まれて居^ゐたり、我々^{われく}の生^うまれて來^きた原由^{げんゆ}の如^{ごと}きは、三尺^{じやく}の小兒^{こども}も皆^{みな}な知^しつて居^ゐるとで、何^{なに}も改^{あらた}めて疑問^{ぎもん}とするの必要^{ひつやう}が無いでは無^ないかと云^いふ意味^{いみ}が、十分^{じふぶん}に顯^{あら}はれて居^ゐ

たゝすると、

『我々は臍から出て、墓に入る』

と、一人が大きな聲で嘲つた。一同は、是れが爲めに再び手を打つて大に笑つた。

芳男は眞赤な顔して、手持無沙汰に席に復つたところがある。

然れども、『何故に人は生れて來たか』と云ふ一事は、芳男の胸に、幼き時から萌された深き苦き疑問であつた。

『御腹が賤しくて居らつしやるから』

と云ふ女中共の陰口は、幼き芳男の頭腦に甚大の侮辱を打ち込んだので、疑問はやがて自然に其の間から、芽を出した。

(二)

芳男は藤井子爵の次男として、番丁の宏大な富有の邸宅に、多くの男女に尊敬は

れて生長した。けれど彼は子爵夫人の出では無くて、庶子である。彼は生母と云ふものを知らない、其の顔も知らねば、其の素姓も知らぬ。周囲の男女は、表面に彼を尊敬ふ中にも、實は常に痛烈な侮辱を加えて居た。彼は幼き心にも、早く其の毒ある刺の苦痛を知つた。少こし粗暴な舉動でもすると、直ぐと女中共が『御腹が賤しくて居らつしやるから』と、さゝやき合ふ。其れが小兒の耳にも、大鐘の如くに響いた。

『御腹が賤しい』

彼は此の短い一語の中に、一身の深い秘密が封鎖されて居ることを悟つた。彼は年毎は、我が身の孤獨の寂寞を次第に深く味ふようになつた。彼は常に人が我が身の秘密に就きて、さゝやき合ふてのみ居るように感じた。従て知らずくの間、斷えず一種猜忌の眼を以て、人の顔にも言語にも注意する惡癖を養つて仕舞つた。而して此の惡癖は、やがて又た周囲の人達に、『御腹が賤しくて居らつ

しやるから』を言はせる倔強の材料を與えるの結果に陥つた。

彼は自分の前に置かれた秘密の函に手を着けるを痛く恐れた。此の函に封鎖されてある所のものが、我身の名譽の爲めにも、幸福の爲めにも、決して味方するもので無いを思つた。其れ故、秘密は秘密として、永遠に葬り去る方が安全で、且つ善事であるようにも思つた。然しながら、我身の生命、眞實の我身は、此の函の底に封じられてあるので、秘密の發かれない限り、我身は是れ虚假の影に過ぎないを思つた。其れ故に彼は、長い間、自殺の如き怖はい思をして、我身の探險に注意を拂つた。苦心の結果は、何時ともなしに、臃ろげながら、自身の眞實に就て、其の輪廓を描くことが出来るようになった。

其れに依て見ると、彼の生母は、其名をお駒と言つた。元と神田邊の鏝職とか何とかの職人の娘で、此の藤井邸へ小間使奉公に上がったものである。而して子爵と此のお駒との間に生れたのが芳男である。是れが爲めに子爵夫人は非常な嫉